

「地図豆」の地図を広げて街歩き

114-3 神田川のみなもとまで 上流(12.0km)

【街歩きの概要】

井の頭池の湧水を源として東へと流下し、隅田川に注ぐ神田川をひたすら歩く。

第三回は、(永福町駅) 永福稲荷神社・永福寺あたりから、井の頭公園湧水までをたどる。



桜の井の頭公園

【道順】

永福町駅→永福稲荷神社・永福寺→永福橋から距離標→向陽橋・八幡神社→塚山公園→三井の森公園→池袋橋→富士見ヶ丘駅→井の頭線電車庫→久我山商店街→井の頭1丁目支流→三鷹台駅・立教女学院→8井の頭公園南口→玉光神社・大盛寺→弁財天→井の頭公園湧水→吉祥寺駅

地図豆知識：神田川（共通）

神田川は、三鷹市の井の頭池を源として流下し、善福寺川、妙正寺川を合流したのち、JR 水道橋駅付近で日本橋川を分派し、隅田川に注ぐ全長約 25km の河川である。

かつては、神田川の関口大洗堰から上流部分を「神田上水」、同堰から飯田橋付近までを「江戸川」、さらに下流を「平川」あるいは「神田川」と呼んでいた。それは飯田橋から下流部分が 1660 年に「平川放水路」として人工的に開削されたからである。

最近では、都市化に対応する流下能力を増強するため、江戸川分水路、高田馬場分水路

(下落合)、水道橋分水路などが、さらには本流の「環状七号線地下調節池」だけでなく、善福寺川、妙正寺川にも地下調整池が建設されている。

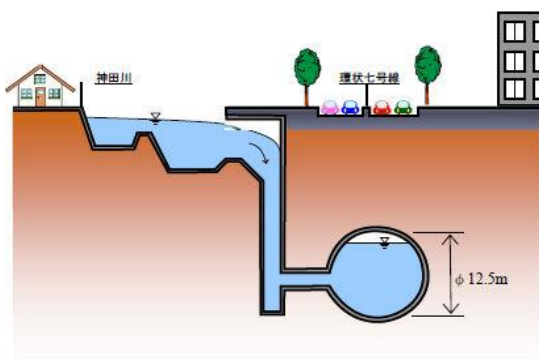


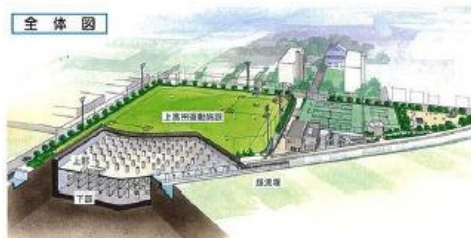
図 2- 2 神田川・環状七号線地下調節池概念図



上高田調節池 写真



神田川・環状七号線地下調節池

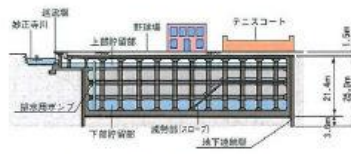


上高田調節池 全体図



神田川取水施設取水状況

断面図

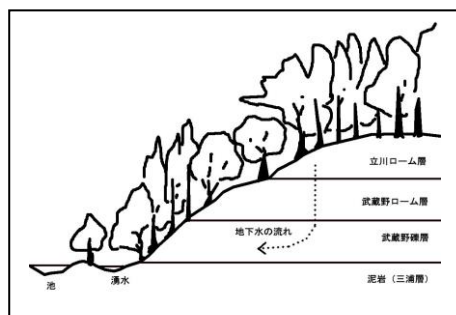


上高田調節池 断面図

「地下調節池」について

地図豆知識：崖地の自然

関東平野では、基盤となる地層の上に関東ローム層と呼ばれる富士山や箱根火山の火山灰が堆積していて、基盤（礫や粘土層）は水分を含んでいる。したがって、ショートケーキの切り口のように粘土層などがむき出しになった浸食崖のちょっとした谷間からは、浸み出す湧き水や泉が見られる。



一方で、こうした浸食崖の地形は日本各地どこにもあって、豪雨による崖崩れなどの災害被害を受けやすい場所である。したがって、従来周辺住民は地域を災害から守るために、崖地の開発を出来るだけ遅らせてきた。崖の上下には住宅地が広がっても、その狭間になった傾斜地には鬱蒼とした常緑広葉樹林が残されてきたのである。

ところが、東京のような大都会では、こうした地域にも開発の手が入っている。それでも一万分の一の地形図をよく見ると、込みあった等高線の連なりの中に、森林地を示す緑色の塊を随所に発見できる。

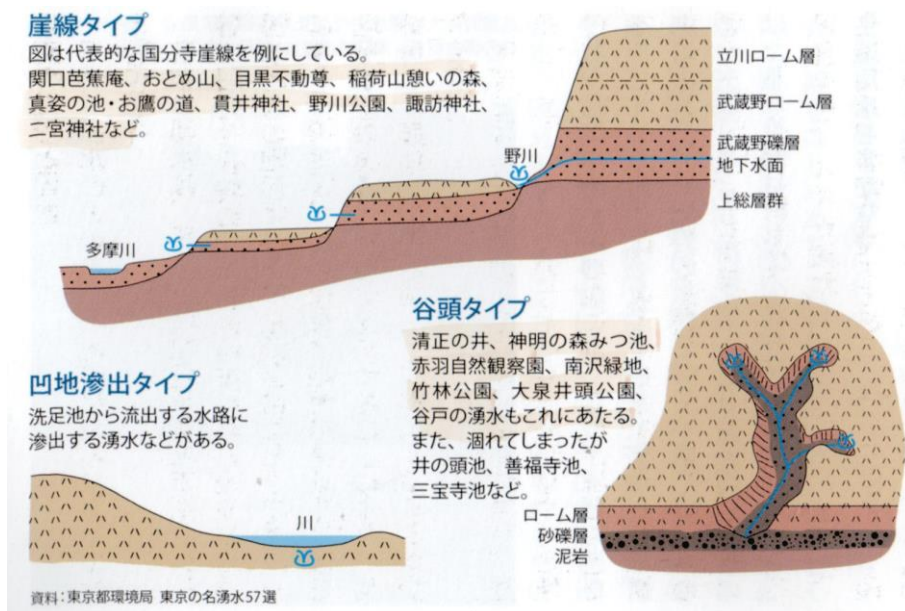


むかしは、こうした「泉」の地図記号が用意されたこともあったが、現在の地図には無い

地図豆知識：湧水

湧水は、以下のようなタイプに分類される。街歩きの際には、それぞれの湧水がどのタイプのものか観察してみるといい。

- ・崖線タイプ：川によって浸食された台地の段丘崖や断層面に露出した砂礫層から湧くもの。砂礫層の下部は水を透しにくい粘土層や泥岩になっていることが多い。湧水を供給するかん養域はごく狭い範囲である。
- ・谷頭タイプ：台地上の馬蹄型や凹地形などをした谷頭（台地面の谷の奥）の地形的に水を含む層が露出したところから湧くもの。地下水が湧水する力で谷頭地形が形成されることが多く、かん養域はごく広い範囲である。
- ・凹地しみだしタイプ：川床や凹地に地下水や伏流水が圧力でしみだしてできる湧水。かん養域は地下水や伏流水に関連した広い範囲である。



湧水の分類（東京都環境局「東京の名水57泉」から）

【街歩き解説】

・永福町・永福稲荷神社・永福寺

永福町駅からは、永福稲荷神社を経て、一旦蔵下橋方向へ出て、前回歩きとのつじつまを合わせるため神田川縁へと戻り、永福橋方向へ向かう。永福稲荷神社は、神田川を左岸北の段丘上にあり、享禄3年（1530）の建立。江戸時代には永福寺の境内にあったという。

永福町駅から通りにかかる永福橋を渡り右岸に出た先には、門前に萬歳山永福寺と刻まれた石柱が見えると、永福寺である。同寺は、大永2年（1522）の創建と伝えられ、永平寺村の名前の由来となった。昭和20年の戦災によりことごとく焼失したが現在、本堂、庫裏が復興したという。

辺りには、隣接して七つの寺院が建ち並んでおり、「永福の寺町」を形成している。。それぞれのお寺の前には親切な説明板があって、これらの寺院は関東大震災のあと都心から移転したものが多い。東の端には築地本願寺和田堀廟所の広大な墓地が広がっている。築地本願寺は関東大震災により焼失し、その別院がこの地に移された。ここは、明治大学和泉校舎と同様に、もと幕府の焰硝蔵があり、明治以後は陸軍省火薬庫となっていたが、その廃止とともにその跡が払い下げられ、築地本願寺が広大な墓地を造営したものである。

・永福橋から

永福橋から神田橋、八幡橋、鎌倉橋までは、右岸縁の小道よりは、旧神田川が作ったハケ下に延びる一車線幅の道（旧神田川跡と思われる）を進むとよい。このコースのうち宮下橋の先から神田橋までは桜並木が続く。

神田橋手前の東電総合グラウンド付近は、ケヤキなどの茂る歩道が続いていて、辺りには、「すみだがわ 18.0km、みなもと 6.6km」を示す距離標がある。

蔵下橋から神田橋、向陽橋、八幡橋へかけての神田川は、左右に段丘を作りながら流れているが、右岸のハケ下までの拡がり、教育・運動施設に、左岸のそれは住宅地に利用されているが、過去には、いずれも水田として利用されていたことが旧地形図で明らかだ。

向陽橋のハケ下にある向陽中学校庭付近は「御屋敷山」と通称され、それは「ここに知行地を持っていた旗本加藤家の庭に古墳が築山となっていた」からだというが、現在の地形図にはその影もないが、明治42年の地形図からは、古墳らしき形をした等高線の高まりが見えるが、はたして？



永福寺 / 八幡神社の神輿蔵

・八幡神社

八幡橋の右岸には、大田道灌が江戸城築城の際（1457）に、家臣柏木左衛門尉に命じて鎌倉の鶴岡八幡を勧請したとされる下高井戸八幡神社がある。神社まわりには木々が鬱蒼と茂り、昔の鎮守の森の面影を感じることができる。

八幡神社の上流には鎌倉橋があって、その名は、ここを鎌倉街道が通っていたからだとい、かつての鎌倉街道はこの付近から大宮八幡宮に通じていたらしい。また一説には、大田道灌が近くに高井戸八幡神社を建立させた際、鎌倉八幡宮の神霊を勧請したので鎮座地に近いこの橋を鎌倉橋と名づけたともいわれている。



八幡神社先の旧河道跡と思われる道（左） / 塚山公園 縄文中期住居跡

・三井の森公園など

塚山橋から先左岸のハケ下の道を進むと、段丘斜面上には杉並区立柏の宮公園（旧日本興業銀行のグラウンド）、次いで同区立三井の森公園が広がる。ここも旧三井グラウンドの再開発に際し、崖線部分の雑木林を区立公園として残したもの。さらに、高井戸中学校、杉並清掃工場と続く。右岸も塚山公園の次は、都立杉並総合高校、段丘上の高井戸東小学校、低地の日本郵政グラウンドなどと公共施設が続く。



三井の森公園 / 富士見橋から先の対岸（右岸）のハケ

・池袋橋

日本郵政グラウンド先の池袋橋からは、現神田川から離れて、右岸の南にある旧神田川の川跡の道を高井戸駅の先にある、やなぎ橋まで進む。それは、地形図上ではもちろんのこと、現地でも容易に分かる不自然な曲線を描く道である。川跡の道は、富士見ヶ丘駅近くの月見橋まで続くのだが、やなぎ橋以降は、入口がやや難解なので、同橋を渡った後は左岸縁の道を進む。

池袋橋付近には、旧神田川に堰が設けられ、（左岸から）北へ分流する流れがあったと言われるが、現地で堰と小川の面影は全く見られないが、明治42年の地形図でなら読み取ることができる。

この間、できるだけ神田川右岸の脇道を進むと、旧河道跡を想像させる屈曲の多い道を発見できる。その一つである富士見ヶ丘駅手前あかね橋付近の旧河道跡さらに進んで、富士見ヶ丘駅前に架かるのが月見橋である。ここからは、左岸を進むと、井の頭線の電車庫が終わるあたりまでの対岸（右岸）は、旧神田川浸食したハケの急斜面が連続していることが良く分かる。



池袋橋付近（北へ分流あり） / 富士見ヶ丘駅手前あかね橋付近旧河道跡

・久我山橋、宮下橋

江戸時代から昭和にかけて、旧久我山村に架かっていたのは、久我山駅前に架かる久我山橋。そして、かつて「江戸道」と呼ばれていた古道が、神田川を越えるところに架かっているのが次の宮下橋である。同橋の北には、久我山村の鎮守の稲荷神社がある。また、前述したが、宮下橋の先から三鷹台手前の神田橋までは桜並木が続いている。

久我山の地名の由来については、陸地や空閑地を意味する「くが」との関係が言われるほか、かつては「こがやま」と発音されていたのが、昭和 8 年の帝都電鉄（現井の頭線）が開通したときに、その駅名に「くがやま」と振り仮名がつけられ、それが普及したとする説もあるのだとか。

宮下橋と次のみずき橋の間には、井之頭一丁目の谷から支流が合流していた痕跡を表現する小道の存在を見ることができる。



久我山商店街 / 井之頭一丁目の谷から支流跡

・三鷹台駅、夕焼け橋

三鷹台駅前の丸山橋を渡り、右手に立教女学院を見ながら、神田上水橋へと進む。

この間の神田川のほとんどは、コンクリート三面張りの都市河川で、川の両側に家が建ち並んでいたが、ここ神田上水橋から上流の夕焼け橋までは自然河川らしい景観を維持しようとしている気配が感じられる。



夕焼け橋辺り / 井之頭池

・玉光神社・大盛寺・弁財天・井之頭池

そして、井之頭公園駅を過ぎると、文字通り井之頭公園に入る。右手に池を眺めながらの南岸を進むと、玉光神社・大盛寺・弁財天と続く。

弁財天については、「新編武蔵風土記稿」に「弁財天社 除地、一町、井ノ頭の池の内にあり、縁起に云、當社は建久八年源頼朝平家追悼の祈願に因て、建立せし所にて、其後正慶二年新田義貞鎌倉方と對陣の時も、祈誓ありてありてついに北条高時を亡せしとぞ、・・・」とある。徳川将軍家とのかかわりも深く、家康は井の頭池の湧水「お茶の水」でお茶をたて、3代家光は鷹狩りでたびたび訪れ、「井の頭」の名前を付けたとも。

江戸時代も中ごろには、神田上水源の水神として、また音楽、芸能の守護神として、江戸庶民の信仰対象となり、また絶好の日帰りの行楽スポットでもあったという。



「御茶の水」 / 弁財天

・井の頭公園湧水

池の西の端、高台のすぐ下の石組みの中からきれいな水が湧き出ている。ここは昔から「御茶の水」と呼ばれ、将軍が狩に来たときこの水でお茶を立てたことからその名前がついたという。

このあたりの標高は 50m ほどである。武蔵野台地を源流とする神田川、善福寺川、石神井川は、この標高にある井の頭池、善福寺池、三宝寺池を湧水池として流下している。ほぼ同標高の位置から湧きだしていることは、武蔵野台地の地質・地層との関連で説明できる。

これらは、前述「地図豆知識：湧水」の「谷頭タイプ」にあたるもので、国土地理院発行の地形図「東京西北部」などの 50 メートルの等高線をなぞってみると、井の頭池、善福寺池、富士見池がすべて、この等高線のすぐ下に並ぶ。黒目川の支流の谷頭にも、この標高付近に湧水がある（黒目川天神社）。三宝寺池だけは少し低い位置にあるが、標高差は 5 メートルくらいである。

井の頭池の湧水は、過去には相当な量の湧水があったのだから、地下にはここへ地下水を集める「水みち」があったはずである。扇状地の旧河道は透水性がいいので、ローム層などで埋まってしまうと「水みち」になり、それが地表に出るところが湧水になる。井の頭池は、青梅を扇頭とする古扇状地面を最大傾斜方向へ流下した、古多摩川の旧河道を「水みち」とする湧水である。

無粋な話になるが、現在は背後に建てられた高層建築物などの影響で地下水脈が絶たれ、自然湧水ではなく、地下水をポンプアップした水だという。

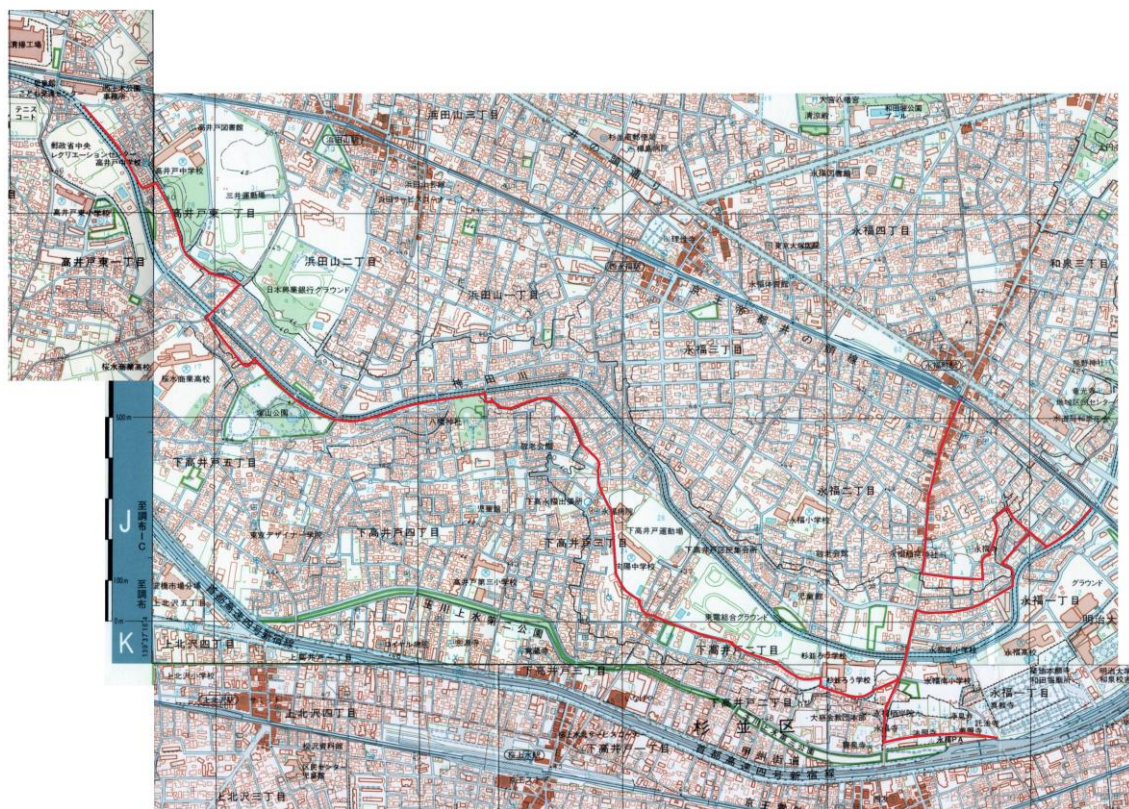
・吉祥寺駅へ

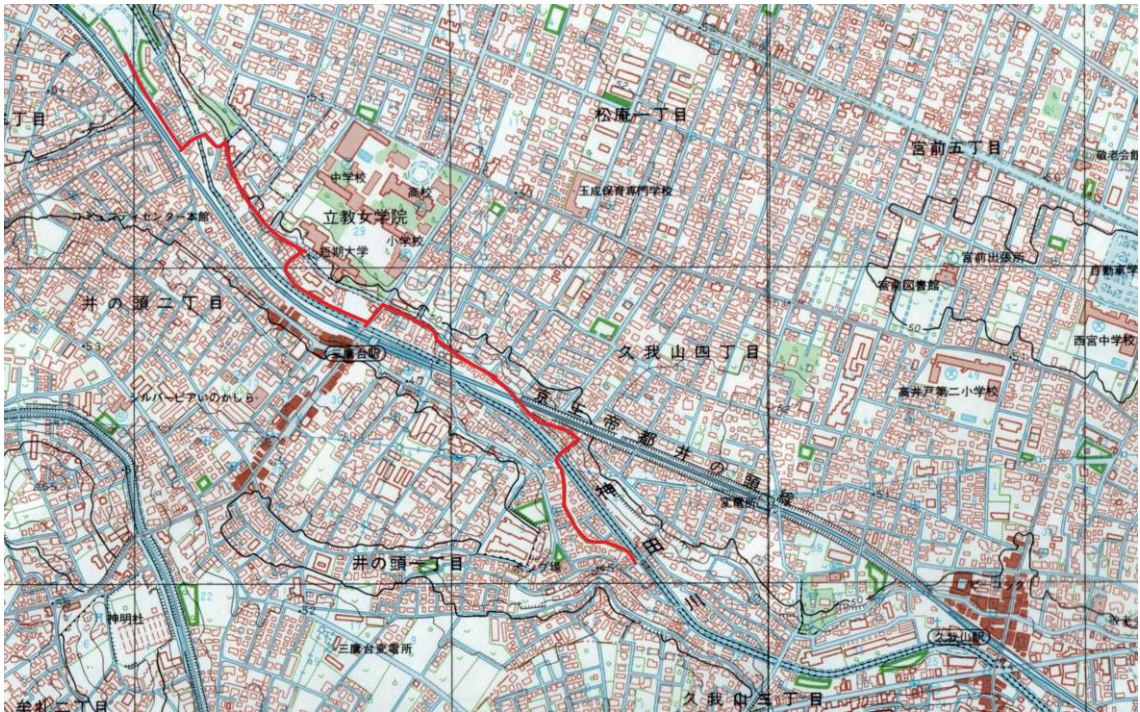
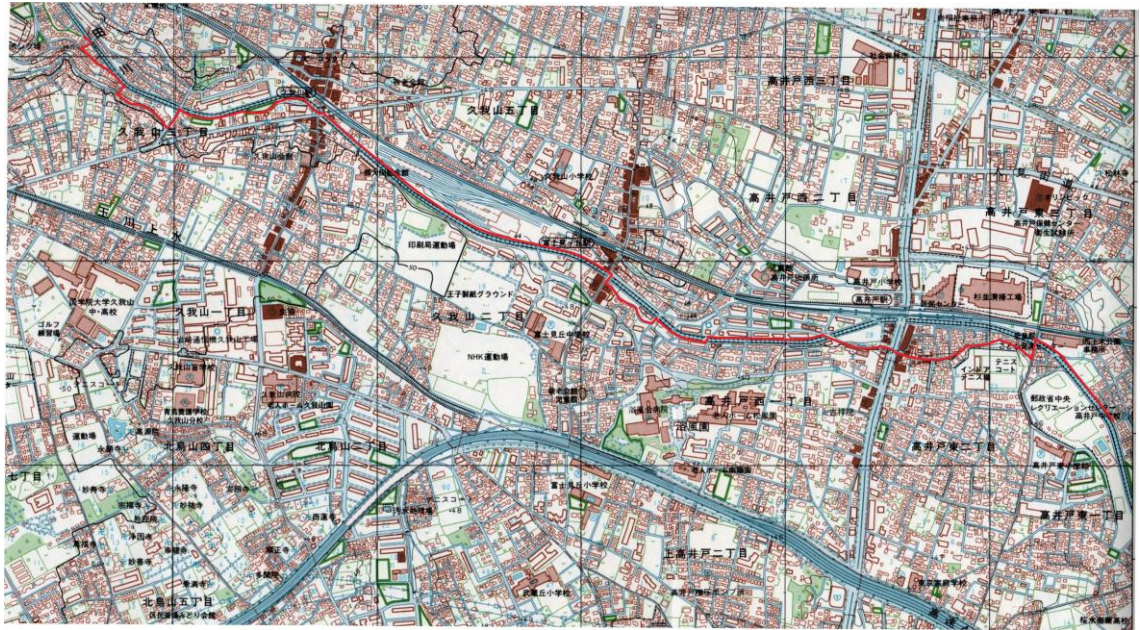
神田川の橋名一覧（三）

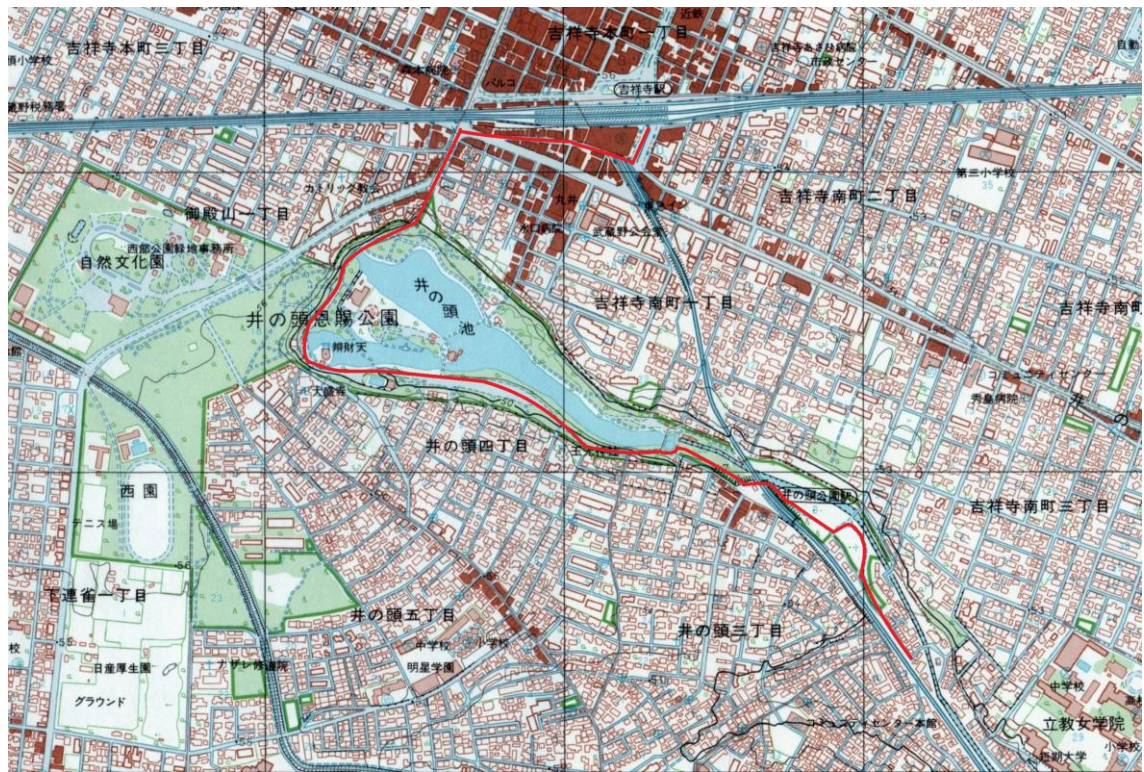
橋名	所在地名（右岸）
永高橋	杉並区永福
ひまわり橋	杉並区永福
永福橋	杉並区永福
かんな橋	杉並区永福
神田橋	杉並区永福
幸福橋	杉並区永福
向陽橋	杉並区永福
弥生橋	杉並区浜田山
むつみ橋	杉並区浜田山
八幡橋	杉並区浜田山
藤和橋	杉並区浜田山
梢橋	杉並区浜田山
鎌倉橋	杉並区浜田山
塚山橋	杉並区浜田山
堂ノ下橋	杉並区高井戸東
乙女橋	杉並区高井戸東
池袋橋	杉並区高井戸東
正用下橋	杉並区高井戸東
高井戸橋	杉並区高井戸東
佃橋	杉並区高井戸西
あずま橋	杉並区高井戸西
やなぎ橋	杉並区高井戸西
錦橋	杉並区高井戸西
むつみ橋	杉並区高井戸西
あかね橋	杉並区高井戸西
高砂橋	杉並区高井戸西
月見橋	杉並区久我山
(京王電鉄専用橋)	杉並区久我山
清水橋	杉並区久我山
久我山橋	杉並区久我山
都橋	杉並区久我山
宮下人道橋	杉並区久我山
宮下橋	杉並区久我山

緑橋	杉並区久我山
みすぎ橋	杉並区久我山
神田橋	三鷹市井の頭
丸山橋	三鷹市井の頭
あしはら橋	三鷹市井の頭
神田上水橋	三鷹市井の頭
夕やけ橋	三鷹市井の頭
よしきり橋	三鷹市井の頭
水門橋	三鷹市井の頭

ルートマップ







**** オフィス 地図豆 yamaoka mitsuharu ****